日蓮大聖人御書全集

四条金吾殿御返事（しじょうきんごどのごへんじ）

（不可惜所領の事（ふかしゃくしょりょうのこと））

新版1582～1584

四条金吾殿御返事（不可惜所領の事）

建治3年（'77）7月　56歳　四条金吾

去ぬる月二十五日の御文、同月の二十七日の酉時に来って候。仰せ下さるる状と、また起請かくまじきよしの御せいじょうとを見候えば、優曇華のさきたるをみるか、赤梅檀のふたばになるをえたるか。めずらし、こうばし。

三明六通を得給う上、法華経にて初地・初住にのぼらせ給える証果の大阿羅漢、得無生忍の菩薩なりし舎利弗・目連・迦葉等だにも、娑婆世界の末法に法華経を弘通せん

ことの大難こらえかねければ、かなうまじき由、辞退候いき。まして、三惑未断の末代の凡夫、いかでか、この経の行者となるべき。たとい日蓮一人は杖木・瓦礫・悪口・王難をもしのぶとも、妻子を帯せる無智の俗なんどは、いかでか叶うべき。「中々信ぜざらんはよかりなん。すえとおらず、しばしならば、人にわらわれなん」と不便におもい候いしに、度々の難、二箇度の御勘気に心ざしをあらわし給うだにも不思議なるに、かくおどさるるに、二所の所領をすて法華経を信じとおすべしと御起請候こと、いかにとも

申すばかりなし。

普賢・文殊等なお末代はいかんがと仏思しめして、妙法蓮華経の五字をば地涌千界の上首・上行等の四人にこそ仰せつけられて候え。ただ、事の心を案ずるに、日蓮が道をたすけんと、上行菩薩、貴辺の御身に入りかわらせ給えるか。また教主釈尊の御計らいか。

彼の御内の人々うちはびこって、良観・竜象が計らいにてやじょうあるらん。起請をかかせ給いなば、いよいよかつばらおごりてかたがたにふれ申さば、鎌倉の内に日蓮

が弟子等一人もなくせめうしないなん。

凡夫のならい、身の上ははからいがたし。これをよくよくしるを賢人・聖人とは申すなり。遠きをばしばらくおかせ給え。近きは武蔵のこう殿、両所をすてて入道になり、結句は多くの所領・男女のきゅうだち・御ぜん等をすてて御遁世と承る。とのは子なし、たのもしき兄弟なし。わずかの二所の所領なり。

一生はゆめの上、明日をごせず。いかなる乞食にはなるとも、法華経にきずをつけ給うべからず。されば、同じく

はなげきたるけしきなくて、この状にかきたるがごとく、すこしもへつらわず振る舞い仰せあるべし。中々へつらうならば、あしかりなん。

たとい所領をめされ追い出だし給うとも、十羅刹女の御計らいにてぞあるらんとふかくたのませ給うべし。日蓮は、ながされずしてかまくらにだにもありしかば、有りしいくさに一定打ち殺されなん。これもまた、御内にてはあしかりぬべければ、釈迦仏の御計らいにてやあるらん。

陳状は申して候えども、またそれに僧は候えども、あ

覚束　遣

まりのおぼつかなさに三位房をつかわすべく候に、いま

だ所労きらきらしく候わず候えば、同じことにこの御房

参　大学　滝

をまいらせ候。だいがくの三郎殿か、たきの太郎殿か、

富木　暇　書　上

とき殿かに、いとまに随ってかかせてあげさせ給うべし。

上　切　甚　急　内

これはあげなば事きれなん。いとういそがずとも、内々うち

認　他　彼　奴　原　騒

をしたため、またほかのかつばらにもあまねくさわがせて

差出　鎌倉　披露

さしいだしたらば、もしやこの文かまくら内にもひろうし、

進　禍

上へもまいることもやあるらん。わざわいの幸いはこれな

り。法華経の御事は已前に申しふりぬ。しかれども、小事こ

そ善よりはおこって候え。大事になりぬれば、必ず大いなるさわぎが大いなる幸いとなるなり。この陳状、人ごとにみるならば、彼らがはじあらわるべし。

ただ一口に申し給え。「我とは御内を出でて所領をあぐべからず。上よりめされいださんは、法華経の御布施、幸いと思うべし」とののしらせ給え。かえすがえす奉行人にへつらうけしきなかれ。「この所領は上より給びたるにはあらず。大事の御所労を法華経の薬をもってたすけまいらせて給びて候所領なれば、召すならば御所労こそまた

ぜん　起　そうら　だいじ　かなら　おお
騒　おお　さいわ　ちんじょう　ひと
見　かれ　恥　顕
ひとくち　もう　たま　われ　みうち　い　しょりょう　上
かみ　召　出　ほけきょう　おんふせ　さいわ
おも　旬　ぶぎょうにん
たま
諂　気　色　しょりょう　かみ　た
だいじ　ごしょろう　ほけきょう　くすり　助
たす　そうろうしょりょう　め　ごしょろう

返
かえり候わんずれ。その時は、頼基に御たいじょう候と
も、用いまいらせ候まじく候」と、うちあてにくぞうげ
にてかえるべし。

あなかしこ、あなかしこ、御よりあいあるべからず。よる
は用心きびしく、夜廻りの殿原かたらいて用い、常にはより
あわるべし。今度、御内をだにもいだされずば、十に九は
内のものねらいなん。かまえて、きたなきしにすべからず。

建治三年丁丑七月　　日蓮　花押

四条金吾殿御返事